

「かかり」とは何か

——良基連歌論と世阿弥能楽論——

重田みち

世阿弥は、大和猿楽の藝風と近江猿楽の藝風とを比較して、『風姿花伝』奥義篇に次のように説く。

江州には、幽玄の境を取り立てて、物まねを次にして、かかりを本とす。和州には、先づ物まねを取り立てて、物数を尽くして、しかも幽玄の風体ならんとなり。

また同様の説が、『世子六十以後申楽談儀』に次のように見える。

〔近江猿楽の藝風は〕立どまりて「あつ」と言はする所をば露程も心につけず、たぶたぶと、かかりをのみ本にせし也。……道阿こそ、上果にて、かかるかかりをのづから面白きを、今の近江は、至らずして其体をする間、音曲も風体も延び腐りたる也。

前者は足利義満に高く評価された近江猿楽の犬王道阿弥が健在だった応永十年代前半から半ば前後にかけての説と私は推測しており、後者は犬王没後十年ほどの応永三十年前後の説と見られている。近江猿楽(江州)は、犬王が得意とした天女舞など「幽玄」の藝を中心としたが、大和猿楽(和州)は、『風姿花伝』

物学篇の項目に見える女・老人・鬼など様々な役柄を満遍なく演ずる物まねの多彩さ(物数)を重視し、その一部に観阿弥が演じ足利義満に賞賛された女藝人者などの「幽玄」の物まねも含まれていた。

両者の違いについて、世阿弥は、「幽玄の比重の違いとともに、近江猿楽が「かかり」を旨としていたとも述べている。この「かかり」は、「情趣」と訳されることもあり、歌舞を融合させた動的な美かとも推測され、解釈がびたりと一致しない。美的なことから用いる語であることは確かであるが、いつたいどのようなことを指しているのであろうか。

そもそも「かかり」は、南北朝期から室町初期までの、二条良基やその系統の連歌論に集中的に用いられたことばである。世阿弥が藝論に用いたのも、その影響であろう。一見易しいことばのようにも、前後の文脈が語意をとらえる手掛かりになる用例もあるが、文脈から意味を類推するだけでは、「かかり」の具体的解釈にいまひとつ確信をもちえない例が少なくない。しかし、文脈だけでなく語

の原義に注目すれば、より正確なニュアンスに近づけるのではなからうか。

「かかり」の元の動詞「掛かる」「架かる」は、ものが一箇所や一点ではなく、二つ以上のものにわたり、跨がることをいう。このことに注意すれば、藝道書用語「かかり」は、次の二つのいずれかに解されるのではないか。第一に、次の用例にあるように、「歌人・連歌数寄者・能役者等の作風・藝風」の意、能の作品群・藝種等の集合的な呼称である。

定家は俊成のかかりに似ず。為家は定家のかかりに似ず。されども、みな天下一の堪能也。〔十問最秘抄〕

これは俊成・定家の和歌の作風と解される例である。また次の例は、能の役柄としての女性、女の物まねを、集合的・総称的に呼んだものである。

凡、女がかり、若き為手のたしなみに似合ふ事なり。……ただ世の常の女がかりは、常に見慣るる事なれば、げにはたやすかるべし。ただ衣小袖の出立は、大方の体、よしよしとあるまでなり。舞・白拍子、又は物狂などの女がかり、扇にてもあれ、かざしにてもあれ、いかにも弱々、持さだめずして持つべし。〔風姿花伝「物学篇」〕  
これらは、個々の作品や役ではなく、ある藝種の範疇やある種の作品群を指し示し、「(全体や、ある広がりをもつ範囲に)掛かる、わたるもの」の意味で「かかり」と言っている。

「かかり」は第二に、和歌・連歌、能の謡の詞の続き具合や響き、音韻の流れなどを表す

場合がある。従来、連歌論や能楽論で動きを表すと解されてきたものがこれにあたる。

救済は詞あくまでできて幽玄におもしろかりき。風情をこめて連歌を作る事はなし。ただ能く付きたりし也。一句にて詮あるやうなる句は、いたくなかりし也。ただかかりをむねとし、詞を花香あるやうに使ひしなり。(二)条良基「十問最秘抄」

これは、連歌の名手であった救済が、自身の句を目立たせるのではなく、一座の他の句との繋がり具合を重んじ、うまく付けることを旨としていたことを述べている。

文字移りの美しく、清み濁りの曲に似合ひたるが、かかりには成なり。節は形木、かかりは文字移り、曲は心也。(世阿弥「音曲口伝」)

ここでは、「かかり」は詞から詞への移り、具合に関することであると明言されている。「清み濁りの曲に似合ひたる」は、謡の進行に伴う音韻の響きのよさを言っているのである。

連歌は言葉かかりを元として、心をもとむる事なかれ。いかに心面白くとも詞下賤しく、かかり幽玄ならずは徒事なり。されば摂政殿「二)条良基」も、「連歌は先かかり第一なり。かかりは吟なり、吟はかかりなり」と仰せられけるにや。(宗硯「初心求詠集」)

これは、良基に連歌を学んだ梵灯庵の説を書き留めたとされる文である。連歌はその句自体の思いの内容よりも、上品な詞を選び、詞の続き、具合または詞から受ける全体の印象が

「幽玄」(深みのある優美さ)を感じさせること、すなわち吟の響きの美しさが重要であると説く。この第二の用法の「かかり」は、橋や虹が二つの場所に跨がって架かるように、詞や謡が前から後へと「架かるもの」であるという、時間的な幅のあるニュアンスをもっているのではないか。この類の用例には「全体にわたる趣、雰囲気」などと訳しても文意が通るものがあるが、その全体とは、吟じ、謡う、時間的流れの全体であり、時間的ニュアンスをそれほど意識しなくてもよい場合にそのようにも訳しうると考える。動詞「かかる」の原義に留意し、藝道書の用語「かかり」の基本的語義を以上のように見ておきたい。

さらに、このニュアンスが能の所作をも含む一連の藝全体の時間的流れの意味で用いられたのが、先の『風姿花伝』奥義篇の近江猿楽の藝風であろう。歌論・連歌論には稀な、能楽論ならではの用法である。「立どまりて『あつ』と言はする所をば露程も心にかげず」とあるのは、近江猿楽が、曲中の節目にひときわ観客を引きつけるような演出を入れることをせず、曲全体の流れのよさから生ずる美を大切にしたことを言っているのである。裏返せば、節目節目に「花」のある見どころを作ろうとしたのが、旧来の大和猿楽の行きかたであったことになる。連歌で言えば、目立たない無文の地連歌が続くなかに、時折「めづらし」く「花」を感じさせる有文の句が入る、二条良基が推奨した在りかたに近い。「花」と「面白き」と「めづらしき」が一体であると『花

伝』別紙口伝と通い合う言説が、このような所にもうかがわれる。

しかし、『風姿花伝』奥義篇執筆後、世阿弥は旧来の大和猿楽の藝風を変えて、「かかり」を最重要と位置付けた。『世子六十以後申楽談儀』の次の二説はそれを明示している。

万事かかり也。……かかり、だによければ、わるきことはさして見へず。美しければ、手の足らぬも苦しからぬ也。わるくて手の細か成は、なか／＼悪く見ゆる也。

たゞかゝり也。昔の大和音曲は、さしてかゝりなければ、文字訛りよく聞ゆ。かかりだによければ、訛りは隠るゝ也。

舞台の進行に伴う流れのよさを大切にしながら、しかも観客をはっとさせる「花」(「妙」も指向する——犬王健在の頃、「物数」を基調としながら「幽玄」も指向した世阿弥は、その後「かかり」を基調に置きつつ依然として「花」も重んじた。「かかり」と「花」の共存の実現は容易ではないと思われるが、世阿弥の藝道における理想は高かった。良基の没後四十年を経たこの時期に、むしろその系統の連歌論が世阿弥の美意識を助けた。良基の連歌継承者と交流があったかどうかは未詳であるが、応永二十年代半ば過ぎに執筆したと見られる『風姿花伝』序文に、「歌道は風月延年のかざり」であるから能の藝にも用いるべしと説いたことが思い合わせられる。なかでも「かかり」は、世阿弥後半生の藝道思想に大きく影響を与えた、良基連歌論の概念の代表であった。

(京都造形芸術大学非常勤講師)